

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：15101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730419

研究課題名(和文)アートプロジェクトを媒介とした地域社会における交流と社会的活動に関する実証的研究

研究課題名(英文)Art Projects in Local Society and Its Implications

研究代表者

小泉 元宏(Koizumi, Motohiro)

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：60625234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年急増するアートプロジェクト(AP)を事例に、その地域社会における社会的・文化的影響を、アーティストやAPに関わる市民の社会関係に関する調査から研究してきた。結果、APが、人々の暮らしに密接に関わった場合、市民が潜在的に持つ多様な技能や知識を引き出し、それが市民も交えた新たな文化・社会活動を生むきっかけとなりうることを示された。しかし創造性を持った人々に対する地域活性化に向けた過度な期待は、時にAPにおける市民の役割に目を向けることを阻む場合もあり、既存の創造階級論の見直しの必要性が示唆された。以上の成果は国際学会報告・国際誌への論文投稿等を通じて積極的に国内外に発表している。

研究成果の概要(英文)：This study surveys the social and cultural roles of Art Projects (APs) in local communities. This was accomplished by examining an AP using field research and interviews with the artists and local residents. APs are cultural movements, which develop creative activities centred on art, featuring civic participation. They not only use cultural facilities, but also utilize social spaces, such as closed schools and abandoned residences. Recently, APs have increased in number in Japan, fueled by strong connections with community revitalization. This study shows that APs can foster new citizen-led cultural and societal engagement. In this process, each citizen's creativity plays a significant role, not just the input of the artists. However, since only perceiving the artists as a "creative class" may risk reducing the possibilities of citizens' creativities, paying close attention to the diverse viewpoints of the all AP participants, not only artists, is highly suggested.

研究分野：社会学、文化政策研究

キーワード：アート アートプロジェクト 協働 参加 地域社会 文化運動

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、特に2000年代から、日本の市民社会におけるアートをめぐる場は、大きな変容のときを迎えている。なかでも、かつての美術館・博物館建設ブームに代わる勢いで急増する「アートプロジェクト」は、新たなアートをめぐる場の代表例の一つである。アートプロジェクトとは、文化施設の使用を前提とせず、廃校や古民家、廃工場など、市民社会のさまざまな場において行われる文化事業や文化運動を指す。2000年に新潟県の中山間地域を舞台に始まった「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」や、2005年に別府市の温泉街でスタートした「別府現代芸術祭」、あるいは2010年に瀬戸内海の島々を結んで始まった「瀬戸内国際芸術祭」「Art Setouchi」等の比較的大規模なプロジェクトから、少人数のアーティストらが自主的に行う小さな規模のものまで、全国各地で、多くのアートプロジェクトが初開催を迎えてきた。90年代後半には、片手で数える程度だった日本のアートプロジェクトは、現在、200を超えるほど隆盛している。

アートプロジェクトは、当初、ビエンナーレやトリエンナーレと呼ばれる国際芸術祭の開催形式、すなわち数年毎に一度、一定期間のみ開催されるフェスティバル形式で開かれることが多かった。しかし近年は、「大地の芸術祭」や「瀬戸内国際芸術祭」に見られるように、それらの多くが通年化して行われる傾向が見られる。

日本のアートプロジェクトの特徴として注目すべきは、その目的として、地域活性化や地域再生を掲げる事が多い点である。例えば「取手アートプロジェクト」を主体的に進めてきた熊倉純子らが「社会の側の期待としては、まちづくりや観光に役立つものへの関心は高いが、そのほかの分野に関しては漠然とした眼差しに留まっている」(熊倉監修2014)と述べるように、教育や福祉などを含めた種々の社会的目的のなかでも、特にまちづくりや観光に代表される「地域活性化」への期待を背負いながらアートプロジェクトが展開する傾向が見られる。その背景の一因としては、日本における深刻な少子・高齢化、人口減少社会の到来という社会背景のなかで、国や地方行政による地域活性化策が求められたり、時には、そのための一時的な財源が組まれたりしたことが挙げられるだろう。アートプロジェクトは、都市・地域の社会空間に展開することから、まちづくりや観光を通じた地域活性化策と結びつけやすく、また、(一時的な公金支出が組まれたとはいえ)全体としては国や地方の財政状況が厳しいな

かで文化施設建設や運営よりは比較的財源規模が小さくて済むことから求められる地域活性化策としてより相応しいとみなされる文化事業であったといえよう。

さらに重要な点は、アートプロジェクトにおける「協働のアート」導入の傾向である。アートプロジェクトにおいて展開するアートの様式は、パブリックアートやコミュニティアート、コミュニティダンス、音楽など、種々の現代芸術の潮流が混ざりながら展開する特徴が見られる。しかし、上述した地域活性化への期待も相まって、アートプロジェクトでは、市民がプロジェクトの制作過程や運営に参加する活動が含まれる傾向が頻繁に見られる。協働のアートとは、アーティスト以外の人々の文化生産への参加を伴うアートであり、そこでは必ずしも成果物を前提とするのではなく、人々の活動そのものや共同活動の過程そのものを起こすことが目的となることもある。近年、世界各地で盛んになってきた「対話型アート」や「関係性のアート」などと呼ばれるアート動向とも近い、人々の参加によって特徴付けられるアートが、地域社会各所で展開していることも日本のアートプロジェクトの大きな特徴である。

ところで少子高齢化・人口減少社会への対策のみならず、国際的な社会状況を見た場合、アートプロジェクトの背景には、文化や、それを生む「創造性 creativity」に対する社会からの着目の高まりを見て取ることができるだろう。すなわち現在、日本に限らず世界各地において、創造性は、経済的領域ならびに政治的領域からなる社会的領域のなかで、その重要性を増しつつあるということだ。企業はもちろん、各国や各都市・地域の自治体が、他の主体との競争において優位に立つために、差異化を図る目的で、文化や、それを生む創造性を用いる傾向が見られる。例えば、英国の「クールブリタニア」や、韓国の「韓流政策」、日本の「クールジャパン」など、国家による創造産業やソフトパワーへの注力は、その代表例の一部である。また、都市・地域政策においても、創造性を用いて都市を活性化させる議論、いわゆる創造都市(クリエイティブシティ)論が勢いを見せており、なかでも、その中心的役割を果たす「創造階級」(Florida 2002)と呼ばれる人々が産業活性化・経済振興に果たす役割への期待が、高まりを見せている。代表的な論者であるリチャード・フロリダは、現代の産業振興において最も重要なのは「重要性を持った新たな形式を創造する」(Florida 2002: 68)仕事に従事する「創造階級」の人々の存在だと指摘

し、(自ら認めるように) 政府や行政指導者らからの大きな反響を呼んだ。彼は、魅力的な都市形成を実現するためには、かつてのような都市への工場誘致等ではなく、技術・才能・寛容性などが揃った都市に、創造階級の人々を惹き付けることこそが鍵だ、と指摘したのである。なかでも、アーティストやデザイナーらは、情報や知識産業に関わる人々と並んで、「スーパークリエイティブコア」とフロリダが呼ぶ、創造階級のなかでも中核的な労働者たちであるとされる。創造性は、いまや社会を発展させるのに不可欠な鍵とみなされ、なかでも創造性を持つとされる一部の人々の高い存在価値が謳われているのである。

以上のような文化や創造性をめぐる社会背景の一方で、アートプロジェクトに関する研究は、これまでに芸術学、文化政策学等、各方面から徐々になされてきた。その中には個別のアートプロジェクトに関する調査から、アーティスト、企画者ら、当事者によるアートプロジェクトの現状と歴史を語った記録、対談集などが挙げられる(例えば、勝村(松本)・田中ほか 2008 や、熊倉監修 2014 など)。しかしながら、これらの研究や著作では、先述した文化的領域に対する社会的諸領域のまなざしの変容が、プロジェクトそのもののテーマ性や、市民の文化生産に与える影響などについて、実証的な研究をもとに十分な議論がなされたとは言いがたい。さらに、これまでの芸術祭などの文化事業に関する社会学的研究は、アーティストや愛好家らを中心とした研究が主であり、地域に生きる人々の視点から、その意義や課題点を明らかにし、論じた研究もほとんどなかった。

2. 研究の目的

これら芸術・文化や創造性をめぐる社会環境と先行研究の状況のなかで、本研究は、行政による「文化によるまちづくり」といった地域活性化策として、住民参加によって市民協働で進められるアートプロジェクトが、地域内外から参加する人々にいかなる影響を与えているかを調査、研究することを目的とした。それによって、現代社会におけるアートや創造性の立ち位置を、実際の現場の状況から明らかにし、また、その課題を指摘するためである。

特にアートプロジェクトを契機とした、地域住民らの文化的嗜好や、他の文化的・社会的活動にもたらされた変化、変容等に着眼しながら、聞き取り調査や調査票を用いた調査等を組み合わせることによって、実証的に、地域活性化を目的としたアートプロジェクトによる地域社会の変容過程の検討を行い、その意義や課題を検証してきた(図1参照)。

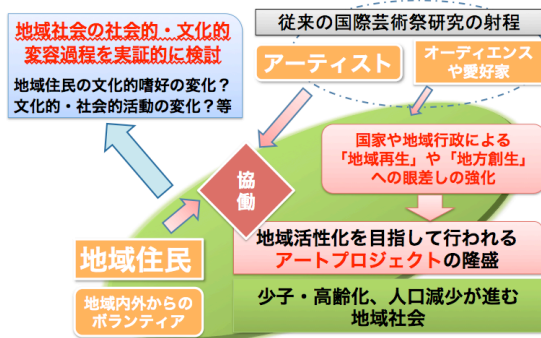


図1 従来の研究枠組と本研究の射程

3. 研究の方法

本研究遂行に当たっては、2012年度から2015年度にかけて、文献調査に加え、ディレクターやアーティスト、キュレーターら、アートプロジェクトの実施主体に対する聞き取り調査を進めてきた。またアートプロジェクトに関わる地域住民や、アートプロジェクトに関わっていない市民らの意向に関する調査を進めてきた。さらに、調査票を用いた調査も4年間にわたって合わせて行いながら、多角的な検討と分析を目指してきた。

主な調査対象は、次の3箇所・プロジェクトである。

- (1) 合併によって誕生した新・都市のアイデンティティ形成を、芸術を通じて図ることを主眼に、行政主導で地域社会との関わりを持ったアート活動を含め、進められてきたプロジェクトである「水と土の芸術祭」(新潟県新潟市)
- (2) 区と連携し、旧・校舎の建物をアーティストイニシアチブによって改装・運営・利用しながら、「都市のなかの地域」に焦点化した活動が進められてきた「アーツ Chiyoda3331」(東京都千代田区)
- (3) 少数のアーティストやデザイナーらが社会的企業を設立しながら、ゲストハウスやシェアハウスなどの運営を中心としたプロジェクトを進めてきた「うかぶ LLC」による「たみ」プロジェクト(鳥取県東伯郡湯梨浜町)

これらの調査対象は、いずれの場合も、地域社会との関係性を重んじていること、また拠点を置く地域の区、市、町などの行政が「文化を用いた都市・地域づくり」を主眼にしている点に共通点が見られる。ただし、活動を展開する場合は、都市から地域社会までさまざまであり、また運営形態や規模、行政等との関わり方の深度に違いが見られるため、プロジェクト相互の比較をする上でも適当であると考え、対象事例とした。

4. 研究成果

本研究の結果、明らかになった点、および

従来の議論に対する新たな知見は、後述する各論文に詳しいが、ここでは特に、各プロジェクトに共通する点を中心に、大きく分けて次の2点を挙げておきたい。

- (1) アートプロジェクトにおけるアート活動によって、市民が潜在的に持つ多様な技能や知識によって変容され、それによって、市民を交えた新しい、多様な文化・社会活動が生まれるきっかけとなりうる。特に、アートプロジェクトが人々の暮らしに密接に関わった場合、新たな文化・社会活動が引き起こされる可能性が高いことが、実証的に示された。この点は、後述するように従来の市民参加型のアートをめぐる議論の見直しの必要性が示唆している。
- (2) アーティストら創造性を持った人々が地域活性化に果たす役割への過度の期待が、アートプロジェクトにおけるアート活動の枠組みを制限しうる。それによって、(1)のアートプロジェクトを契機とした市民による多様な文化・社会活動や、そこに果たす市民の役割に目を向けることが阻まれることも多い。この点からは、既存の創造階級論の見直しの必要性が示唆された。

(1)の点に関しては、「水と土の芸術祭」(新潟県新潟市)、「アーツ Chiyoda3331」(東京都千代田区)、「たみ」プロジェクト(鳥取県湯梨浜町)の各プロジェクトの内部で共通して起こった事象である(但し、活動が3-5年以上の中長期的に展開するなかで顕在化していったことや、アーティストの方法論によって変容しうることに注意されたい)。

例えば「水と土の芸術祭」の参加プロジェクトの一つであり、アーティスト・音楽家の白川昌生と小野田賢三による「沼垂ラジオ」を例にとると、彼らの市民参加型の活動が契機となり、活動に参加した市民らが、のちに、自ら主体的に、「ニュー沼垂ラジオ」という社会・文化活動を形成していく過程が見て取れた。また「アーツ Chiyoda3331」においては、市民協働によって行われるアート活動が、地域の町内会での通例行事に組み込まれ、次第に市民が自ら活動を主導していく様子を観察することができた。さらに、「たみ」の場合においても、活動への参加が実現への契機となり、市民が自ら古書店を始めたり、従来の文化・社会活動を刷新したり、といった形で、新たな文化・社会的活動が形成されていった。これらは、アートプロジェクトを契機とした市民の新たな文化・社会活動の一部の例である。

重要なのは、これらの活動の過程において、各市民が、与えられた活動を単に継承したのではなく、各々の市民が持つ知識や技芸によって、活動を変容させながら、主体的な活動を開始していった点にある。この点からは、

人々の関係性を重視したアート活動に対する従来の議論の見直しの必要性が示唆されている。ランシエール (Rancière 1995, 2004) やビショップ (Bishop 2006) は、「関係性のアート」を提唱したブリオー (Bourriaud 1998) らに対する批判として、次の点を挙げている。すなわち、作者・作品・鑑賞者の関係性を前提とした(従来の)アート作品においては、それぞれ作者(アーティスト)・作品・鑑賞者が自律した主体として存在し、作品は、作者から作品、作品から鑑賞者、と伝わる各々の過程において等価ではなく多様に読解されうる(図2参照)。

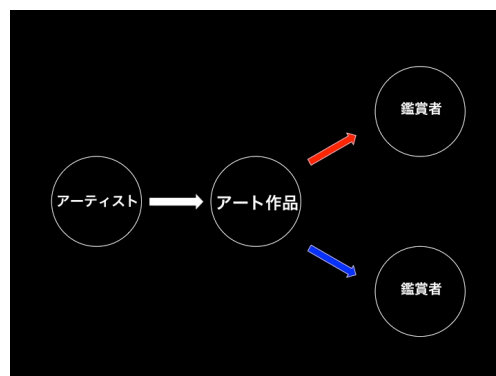


図2 従来のアートをめぐる読解多様性としての政治性の指摘のイメージ

一方、人々の関係性によって成立するアートにおいては、その間の「作品」を介する過程が損なわれることによって、従来のアートにおける多様な読解性としての政治性が滅失していることを指摘したのである。

しかし、本研究によれば、人々の関係性に着眼するアートが、地域社会に展開した場合、たとえ「作品」という過程を経ずとも、多様な政治性は生み出されることが見て取れた。すなわち、アートプロジェクトにおいて、ある時には情報の受け手側だった市民は、その情報を自らの持つ知識や技芸などを踏まえて変容させ、次の時点では、各々異なる情報の送り手となる。すなわち、アートプロジェクトに参加する人々は一様ではなく、各々異なる形でアート活動を受容し、それを自身のなかで(各々の知識や技芸、あるいはジェンダー、職業などによって意識的・無意識的に)変容させ、発信する。ゆえに、必ずしも市民参加型のアートが多様な読解可能性としての政治性を滅失するわけではない(図3参照)。この点は、アート活動を行うアーティストらのみならず、アートプロジェクトの参加者に対する継続的な聞き取り調査から確認された点である。

他方、上記(2)の点に関しては、(1)における市民の新たな文化・社会活動の生起や多義的な政治性を限定化すること、また、近年、文化的諸領域が持つ差異の記号を、社会的諸領域に活用するための視座が強まりを見せていることから(Yudice 2003)、重要な課題

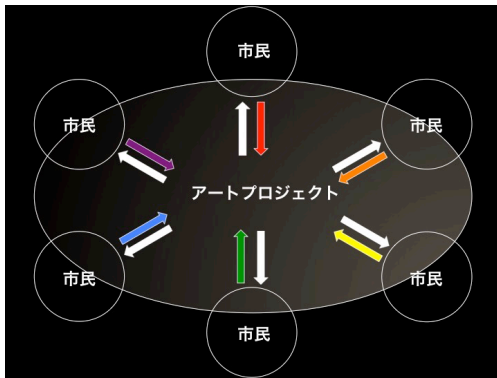


図3 市民参加型のアートをめぐる場における政治性の指摘のイメージ（市民は各々異なる形でアート活動を読み解き、変容させていく）

と考えられる。

前述したように、近年の創造性をめぐる都市活性化に関する議論においては、都市を（特に経済振興の観点から）活性化する源泉として、「創造階級」に属する人々へ着眼する議論が行われ、あるいは政策がなされている側面が見られる。だが、それらの議論や創造都市政策の多くが、特定の国家や都市・地域に区切った枠組みにおける利益の確保を前提としているのに加え、一部の創造階級の人々だけにのみ焦点化しすぎている点に対して、本研究は疑問を投げかけざるを得ない。確かに「創造階級論」を提示したフロリダは、創造階級論がエリート主義的で、排他的だという議論に対して、「あらゆる人々は創造的である」（Florida 2012: 34）とも指摘しながら、人々が等しく創造性を発揮できる社会の実現こそが今、最大の課題である、と述べる。だが、少なくとも彼の議論における創造性とは、特定の都市の経済成長のための「創造資本」（Florida 2012: 32）であり、都市の経済成長に資するか否かを創造性の有無の判断材料としている。ゆえに、その理論は「経済的成長に資する創造階級に属する人材をいかに囲い込むか」という政策に向かうことを助長しがちである。人が持つ創造性を産業構造に組み込み、産業生産の指標の下で人を画一的に整理させる暴力性を孕んでいるとも言え換えられるだろう。既存の「創造階級論」は、特定の国家や都市の経済目標に合わせ、人々を選別する視点を、潜在的に強化している。そこでは、個々人が持つ前提条件の違い（教育環境や福祉の違いといった人々の差異を生み出す要因）や、（実際には多角的な社会の創造性の創出に寄与する）多くの人々の技術・知、あるいは物事の見方の多様性が重視されず、特定の国家や地域の経済的利益に寄与する創造性への賛美が強調され過ぎてしまうということだ。

だが本研究の調査からは、前述したように、アートプロジェクトを契機としながら、市民が持つさまざまな技芸や知識、あるいは、それぞれの人々の物事の見方の違いを経由して、各々異なる新たな文化・社会的活動が生み出されていることが示された。つまり、

人々の関係性を重視したアートプロジェクトにおいて、創造性を発揮する主体は、アーティストに加え、「創造階級以外の」、時に「地域外の」市民でもあるということだ。むしろ、アーティストらは、その関係性を結ぶための、きっかけづくりに寄与している点で、他に代え難い存在であることは間違いない。また、（前述した事例で言えば「ニュー沼垂ラジオ」がそうであったように）行政による枠組みを離れることで、柔軟な活動を新たに展開していく市民たちもいる。市民は、行政の言いなりというわけではないのだ。

しかし、アーティストら「創造階級」の人々を一義的な観点から限定して特権化したり、特定のテーマによって市民の関わりの余地を過度に制限したりすることは、アートプロジェクトを契機とした多様な文化・社会活動の広がりが生み出されるための障害となりうることを鑑みなくてはならない。この点は、各事例のなかでも特に行政との関わりが密接なアートプロジェクトである「水と土の芸術祭」において、行政側の打ち出したいイメージによる選別によってキュレーターらが苦慮する状況が、聞き取り調査や、当事者がまとめた報告書などにおいて見て取れたことから、特に行政との関係性を強くもったプロジェクトにおいて懸念される点である。とはいえ、行政の関わりがあつてこそ、可能となる活動があることもまた、事実である。特に、（一部の商業芸術を除いた）芸術・文化活動は、その活動によって継続的な財源を得ることは難しいため、財源や人材の確保が難しい場合も多い。ゲストハウスやシェアハウス運営による収入源を得ながら、もっとも自立的な運営を進めた「うかぶ LLC」でさえ、県との連携によって得られた利点が（資金のみならず、人々の関係性構築なども含めて）存在することも見受けられた。ゆえに、アートプロジェクト運営においては、特定の社会的利益や恣意的・限定的な観点から活動を限定化しないことこそが求められるといえるだろう。

以上が、本研究によって明らかになった点の全体像である。先述したように、より詳細な点については、下記の発表論文等を参照していただきたい。

〈引用文献〉

Bishop, Claire, 2006, 'The Social Turn: Collaboration and Its Discontents', *Artforum International*, 44 (6): pp. 179-185.
 Bourriaud, Nicolas, 1998, *L' esthétisme relationnelle*, Dijon: Les presses du réel.
 Florida, Richard, 2002, *The Rise of the Creative Class*, New York: Basic Books.
 Florida, Richard, 2012, *The Rise of the Creative Class: Revisited*, New York: Basic Books.

- Rancière, Jacques, 2004, *Malaise dans l'esthétique*, Paris: Galilée.
- Yúdice, George, 2003, *The Expediency of Culture*, Durham: Duke University Press.
- 勝村 (松本) 文子・田中鮎夢ほか、2008、「住民による地域型アートプロジェクトの評価とその社会的要因——大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレを事例として」『文化経済学』6(1): pp. 65-77.
- 熊倉純子監修、2014、『アートプロジェクト (芸術と共創する社会)』水曜社

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① KOIZUMI, Motohiro, in Press, “Creativity in a Shrinking Society: A Case Study of the Water and Land Niigata Art Festival” (査読付論文), *CITIES*, Elsevier.
doi:10.1016/j.cities.2015.10.002
- ② KOIZUMI, Motohiro, 2013, “Collaborative Art in Urban Social Spaces and Its Implications” (査読付プロシーディングス), *Cultural Strategies and Urban Regeneration*, Korea Research Institute for Human Settlements, pp.109-121
- ③ 小泉元宏、2012、「地域社会に『アートプロジェクト』は必要か?—接触領域(コンタクト・ゾーン)としての地域型アートプロジェクト」『地域学論集』第9巻2号、鳥取大学地域学部、pp.77-93
<http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/Repository/metadata/3418>

[学会発表] (計 11 件)

- ① KOIZUMI, Motohiro, 2016/3/17, “Chain of Creativities: For ‘the Era of Creative Citizens’”, Hard City, Soft State: The State of the Urban Imaginative Field, シンガポール国立大学 (シンガポール)
- ② KOIZUMI, Motohiro, 2015/10/16, “Governance with a Creative Citizenry: Public Art Projects for Cultural Vitality in Japanese Cities”, International Symposium on Making a progressive City: Seoul’s Experiences and Beyond, ソウル研究院 (韓国・招待講演)
- ③ KOIZUMI, Motohiro, 2015/8/7, “Uses of Arts in Community: The Changing Role of Culture in the Post-Fordist Age”, Inter Asia Cultural Studies Society Conference 2015, アイルランガ大学 (インドネシア)
- ④ KOIZUMI, Motohiro, 2015/6/21, “New

Art Movements in Japan and the Areas Boundaries”, 19th The Asian Studies Conference Japan, 明治学院大学 (東京都)

- ⑤ KOIZUMI, Motohiro, 2015/4/27, “Connect with Society and People through ‘Art Projects’ in an Era of Personalization”, Alternative Urban Spaces: Cities by and for the People, Asia Research Institute, シンガポール国立大学 (シンガポール・招待講演)
- ⑥ KOIZUMI, Motohiro, 2014/11/6, “Shrinking Society, Community Revitalization, and Art Project: Exploring the Role of the Cultural Movements in an Era of Falling Birthrates and an Aging Society in Japan”, Asia Research Institute Conference: The Resilience of Vernacular Heritage in Asian Cities, シンガポール国立大学 (シンガポール・招待講演)
- ⑦ KOIZUMI, Motohiro, 2014/7/18, “Significance and Issues of “Site-Specific” Art Projects in Japan”, Association of Asian Studies in ASIA, シンガポール国立大学 (招待講演) (シンガポール)
- ⑧ KOIZUMI, Motohiro, 2013/11/24, “A Study of An Artist-Run Residencies ‘Tami’ in Tottori”, The 112th American Anthropological Association, Hilton Chicago (アメリカ合衆国)
- ⑨ KOIZUMI, Motohiro, 2013/9/25, “Collaborative Art in Urban Social Spaces and Its Implications”, Cultural Strategies and Urban Regeneration: Policy Innovation from the Grassroots in East Asia, 国立国土研究院 (KRIHS) (韓国・招待講演)
- ⑩ 小泉元宏、2013/6/30、「関係性のアートと地域課題」日本ボランティア学会[2013年度鳥取大会]、鳥取大学
- ⑪ KOIZUMI, Motohiro, 2013/3/22, “Socially Engaged Art and Its Social Background”, Spiritual Ethics in Developing Urban Culture and Society, ハムカ大学 (インドネシア・招待講演)

[図書] (計 1 件)

KOIZUMI, Motohiro (Co-authors: Yves Cabannes, Mike Douglass, Ritapadawangi et al.), in press, *Cities by and for the People*, アムステルダム大学出版会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小泉 元宏 (KOIZUMI, Motohiro)
鳥取大学・地域学部・准教授
研究者番号: 60625234